新建・寺子屋(モダニズムの研究)236　報告

近代建築を多角的に検討／**モダニズム建築文献再読**；　　**2016. 10.19**

藤森照信『日本の近代建築』(幕末・明治編)(大正・昭和編)- 2　　話:大崎元

―. 藤森照信『日本の近代建築(下)』(大正・昭和編)―

横河民輔・横河工務所　三信ビル（設計・松井貴太郎）

■　寺子屋 236 は 6 人の参加で開催されました。

■　西洋＝欧州からお雇い外国人を通じて直輸入してきた段階を過ぎて明治期も後半に入ると、岡倉天心にみるように、西洋の思想と東洋の思想を相対的に見ることができるようになり、その中で「日本的なるもの」を模索しようとする動きが始まります。

■　建築としてはその前から、様式を自在に、用途様式主義に陥ることなく、設計者の自己意識を拡張するかたちで駆使できる人たちが現れます。それは文学に見る「自我の目覚め」であると指摘されています。

その中からは、表現主義やアールヌーボーなど異端で永続きはしなかったけれど突出した成果を生み出したものもあれば、帝冠様式のような鬼っ子も出てきました。

■　それだけでなく、大正民本主義にもつながるような「合理主義」が建築世界に入ってきます。野田俊彦や佐野利器などの論とともに、アメリカ合理主義の輸入がビルの姿を変えて、まちの姿を変えていきます。

■　西洋では「モダニズム」が様式主義を乗り越える基軸になりました。しかし日本では、モダニズムもまた一つの様式として意識され輸入されたようです。人と場の応答から生活の質を探ることで建築を生み出すというモダニズムの本源は、日本建築の中にモダニズムの本質を見出したライトやレーモンドのような外の目をいったん経なければならなかったのかもしれません。

戦前の丹下健三、前川圀男などの紆余曲折を見ると、モダニズムの本源を受容することの難しさが思い起こされます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新建・寺子屋(モダニズムの研究)236

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再読;

2016.10.19　　話:大崎元

新たな研究と素材の検討について

3. 藤森照信『日本の近代建築(下)』(大正・昭和編)

1)岩波新書 309(赤版)1993 年第 1 刷発行

2)明治から大正、そしてモダンデザインの世界へ

3)モダンデザインとは何か、日本のモダンデザインの始まり

(次回以降)

4. 初期モダニズムに出てくるアントニン・レーモンド

1)日本のデ・スティルとレーモンドの「霊南坂の自邸(1924)」

2)「本野精吾自邸(1924)」のとりあげ、土浦亀城の仕事

3)前川、坂倉、丹下そして村野たちのモダニズム

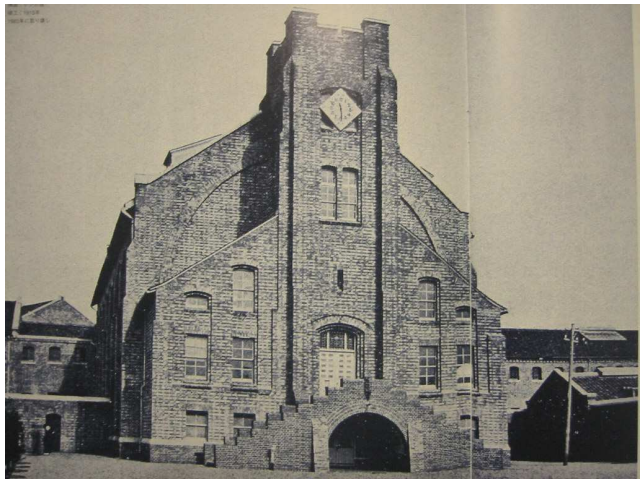
5.「木造モダニズム 1930s－1950s」『SD2000.9』特集号について

1)大川三雄ら(日大グループ)による 2 年間の論考のまとめ

2)レーモンド,土浦,タウト,松村正恒,今井兼次,増沢洵

3)特に逓信省をのべている黒沢隆の論文

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



後藤慶二　豊多摩監獄

次回　＜寺子屋 237＞　■近代建築を多角的に検討■モダニズム建築に関する著作再読

藤森照信『日本の近代建築』(幕末・明治編)(大正・昭和編)- 3　　話:三沢浩

2016 年 11 月 16 日 (第3水曜日定例)　PM 7:15～

場所:新宿区水道町 2-8 長島ビル2階(江戸川橋駅神楽坂駅徒歩5分)

会費:400 円

問合:大崎元 (有)建築工房匠屋 03-3716-1743 3716-8459(fax) VED03705@nifty.com